

大阪府感染症発生動向調査週報（速報）

2018（平成30）年 第38週（9月17日～9月23日）

今週のコメント

～RSウイルス感染症～手洗い、マスクの着用、咳エチケットが重要

定点把握感染症

「RSウイルス感染症 減少続く」

第38週の小児科定点疾患、眼科定点疾患の報告数の総計は2,094例であり、前週比10.7%減であった。定点あたり報告数の第1位はRSウイルス感染症で以下、感染性胃腸炎、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、ヘルパンギーナ、手足口病の順で、上位5疾患の定点あたり報告数はそれぞれ3.0、2.9、1.3、1.0、0.8である。

RSウイルス感染症は前週比10%減の598例で、南河内6.1、大阪市北部4.6、大阪市西部3.7、北河内・大阪市南部3.2、堺市3.0であった。

感染性胃腸炎は18%減の586例で、南河内5.1、中河内4.3、泉州4.0、大阪市南部3.6、北河内3.3である。

A群溶血性レンサ球菌咽頭炎は6%減の266例で、堺市2.7、北河内1.9、中河内1.8、南河内1.7である。ヘルパンギーナは19%減の202例で、南河内・北河内2.2、大阪市北部1.3、大阪市西部1.1であった。手足口病は18%増の158例であり、北河内2.0、南河内・泉州0.9であった。

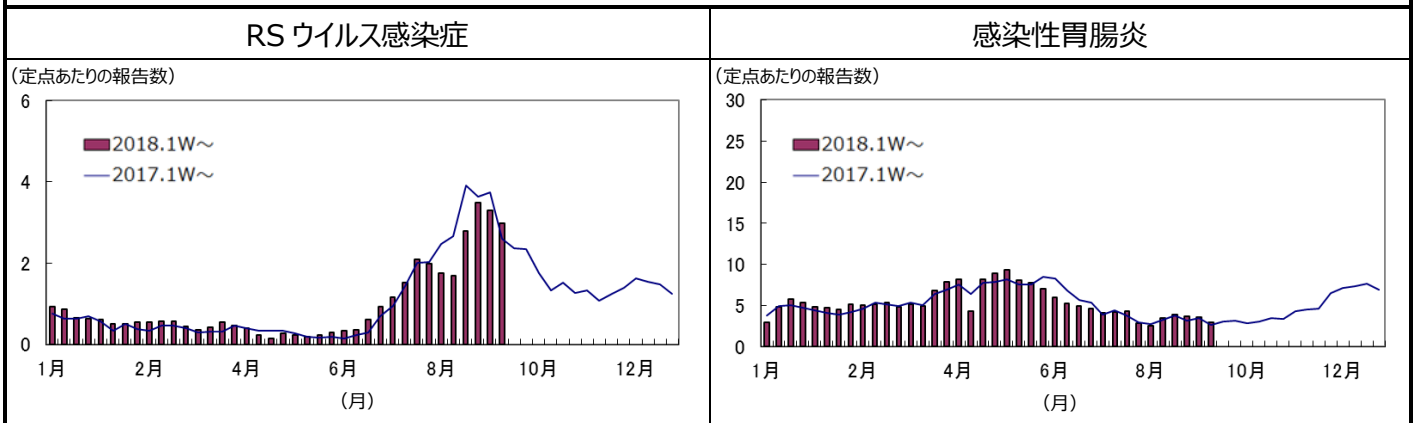


表1. 大阪府小児科・眼科定点把握感染症の動向（2018（平成30）年 第38週 9月17日-9月23日）

第38週の順位	第37週の順位	感染症	2018年 第38週の 定点あたり 報告数	前週比 増減	2017年 第38週の 定点あたり 報告数	2018年 第38週の 年齢別 患者発生数 最大割合値
1	2	RSウイルス感染症	3.0	10%減	2.6	1歳未満_35%
2	1	感染性胃腸炎	2.9	18%減	2.6	1歳_18%
3	3	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1.3	6%減	1.3	5歳_17%
4	4	ヘルパンギーナ	1.0	19%減	0.5	1歳_25%
5	6	手足口病	0.8	18%増	0.9	1歳_32%
参考		インフルエンザ (インフルエンザ定点報告疾患)	0.1	15%減	0.1	10-14歳_22%

第 38 週のコメント

～腸管出血性大腸菌感染症～

食肉・食材の十分な加熱処理、調理器具の十分な洗浄や手洗いの励行などにより、食中毒や感染拡大の予防を徹底することが重要です

全数把握感染症

腸管出血性大腸菌感染症

腸管出血性大腸菌感染症の原因菌は、ベロ毒素を産生する大腸菌で、代表的なものは O(オー)157、O26、O111 がある。汚染飲食物を介する経口感染がほとんどで、出血を伴う腸炎や溶血性尿毒症症候群を起こす場合がある。3-5 日の潜伏期において、激しい腹痛を伴う頻回の水様便の後に、血便となる（出血性大腸炎）。発熱は軽度で、多くは 37℃台である。有症者の 6-7%では、発症数日後から 2 週間以内に、重症の溶血性尿毒症症候群を発症する。

[感染症疫学センターはこちらへ\(外部リンク\)](#)

[腸管出血性大腸菌感染症とは\(国立感染症研究所\)](#)

(累積報告数)

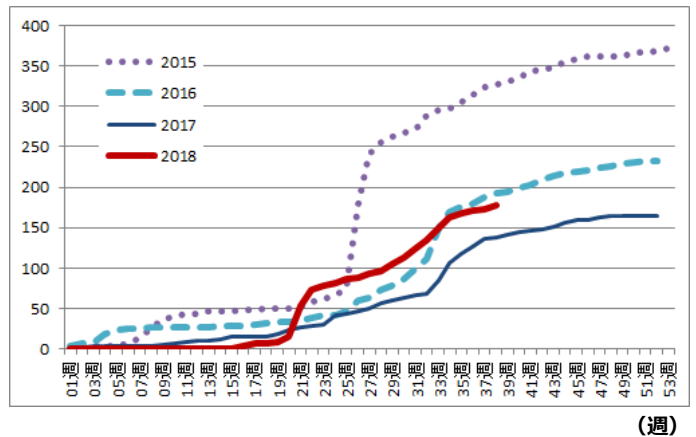


表 2. 大阪府全数報告数（2018(平成 30)年 第 38 週 9 月 17 日 - 9 月 23 日）

*) 注意：この週報は速報性を重視しておりますので、今後の調査に応じて若干の変更が生じることがあります

	疾患名	報告数	豊能	三島	北河内	中河内	南河内	堺市	泉州	大阪市	府内累積報告数
3 類感染症	腸管出血性大腸菌感染症	5	2							3	177
	パラチフス	1								1	2
4 類感染症	A 型肝炎	1			1						38
	デング熱	2	1						1		13
	レジオネラ症（肺炎型）	4			1				2	1	96
5 類感染症 (麻疹、風しんは除く)	アメーバ赤痢	1								1	53
	カルバペネム耐性腸内細菌感染症	2		1						1	132
	後天性免疫不全症候群	4								4	112
	梅毒	8	1		1					6	855
	百日咳	10		1	3			1		5	572
結核 (2018 年 7 月分)	結核 新登録患者数：163 名 (内 肺・喀痰塗抹陽性 60 名) (府内累積報告数 1,075 名、内 肺・喀痰塗抹陽性 417 名)										
麻疹、風しん	風しん 5 名 (豊能 1 名、三島 2 名、北河内 1 名、堺市 1 名、府内累積報告数 16 名) 麻疹 1 名 (泉州 1 名、府内累積報告数 2 名)										

(2018 年 9 月 25 日 集計分)